

(1)評価基準に沿った評価	1人	1人	4人	0人	0人	3.5
(2)記述評価						
・小児気管支ぜんそく患者について、その発症・増悪予防、のために種々の患者を取り巻く職種の方々の参加をもって行う研究である。疾患自体を深く理解し、自己管理支援を行い治療のアドヒアランス向上を目指している。そのために、喘息ドックのシステムを構築し、実際に患者さんの参加を得ている。しかしながら、参加者数が十分ではなく、折角の企画だが、まだ初期の目的を達しているとは言えない。そこで、養護教諭や保育所等の職員をドックに来てもらいドックへの参加を得て小児の対象者の増加を企画している。 ・喘息ドックの周知度と有用性が少しずつ明確になった。 ・アセスメントシートの作成は患者の自己啓発と主治医とのコンタクトの改善に有用と思われる。 ・必要最小限の検査で喘息ドックを行い、その結果、臨床的有用性が明らかになれば、これを各地方に知らせめ広く普及をはかることで、本研究の意義が高まると考えるが如何か。 ・医療機関をはじめ、保健機関、学校などが喘息ドックで得られた喘息児に関するデータを共有して、喘息児の管理と喘息の改善に役立てようというのが、この研究課題の主要な目的で興味ある発想である。 ・ミニドックの構想は評価できるが、未だ保健所で行う方法論や必要な費用等が確立していないのが問題である。 ・プテリジンを指標の一つとして重視しているが、まだ分析ができるのは研究を行っている大学のみであり、この成果をミニドックとして普及させることは、短期間では困難であると思われる。 ・喘息ドックのデータを活かすためには、喘息児の管理に当たる各機関のスタッフが容易にその臨床的な意義を理解できるものでなくてはならない。従って、アセスメントシートで取り上げる事項は普遍的で確立されたものであることが望ましい。						

・専門医療機関と非専門医療機関との連携の糸口として成功している。アセスメントシートを、コントロール状態、呼吸機能検査、FeNOなどの評価と、専門医からの治療方針に関するコメントを記述できる地域連携パスとして活用し、専門医療機関とかかりつけ医の連携のツールとして完成させることに期待したい。

・今後は自己教育を更に担保するようなクリニカルパスへの発展も考えられよう。

・地域の保健機関との更なる連携が望まれる。

・今後、この研究により、喘息児の症状の軽減、研究目標に近づくよう期待されるとともに国際誌への投稿を期待する。